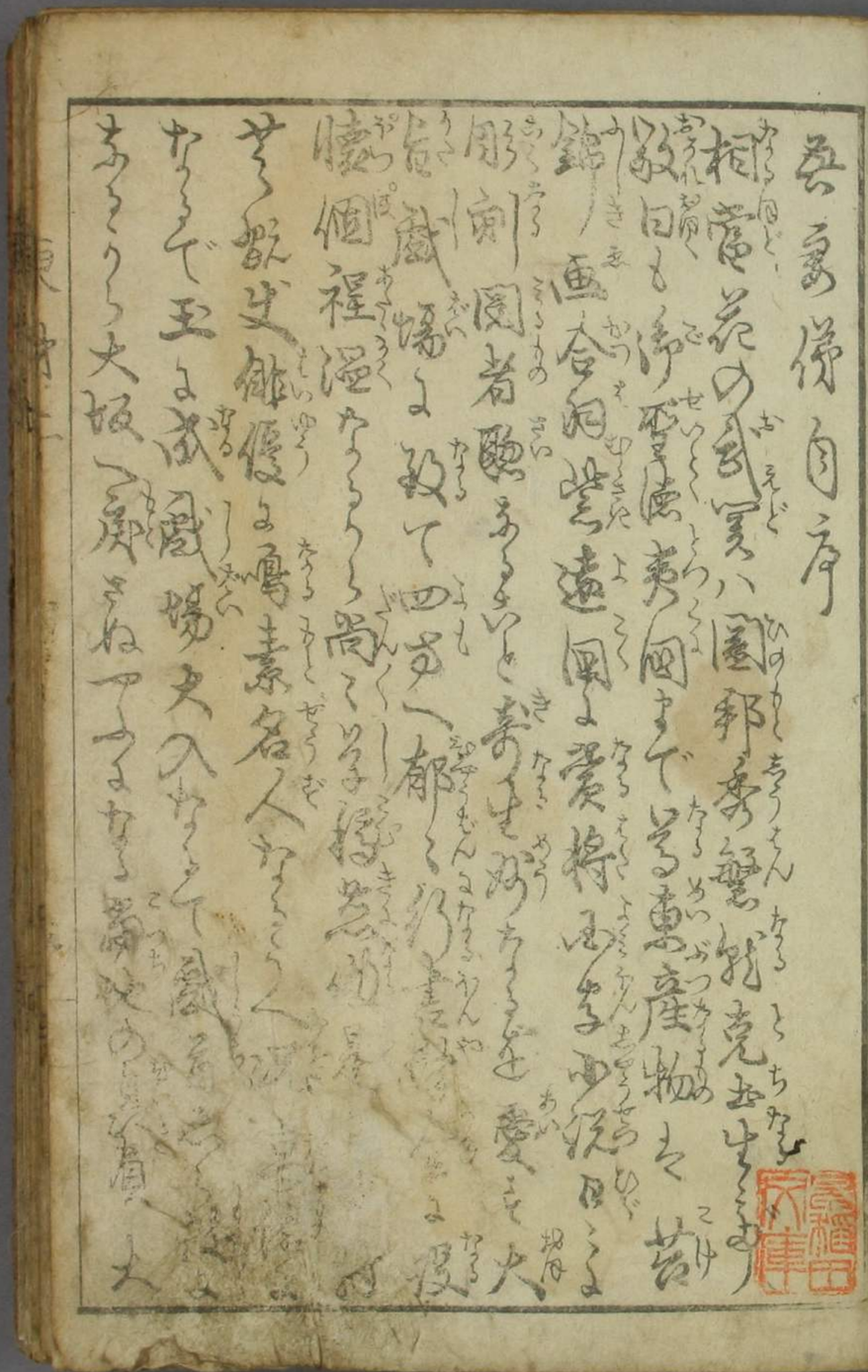
萬壽加賀見東傳

上

へ13
3127
1

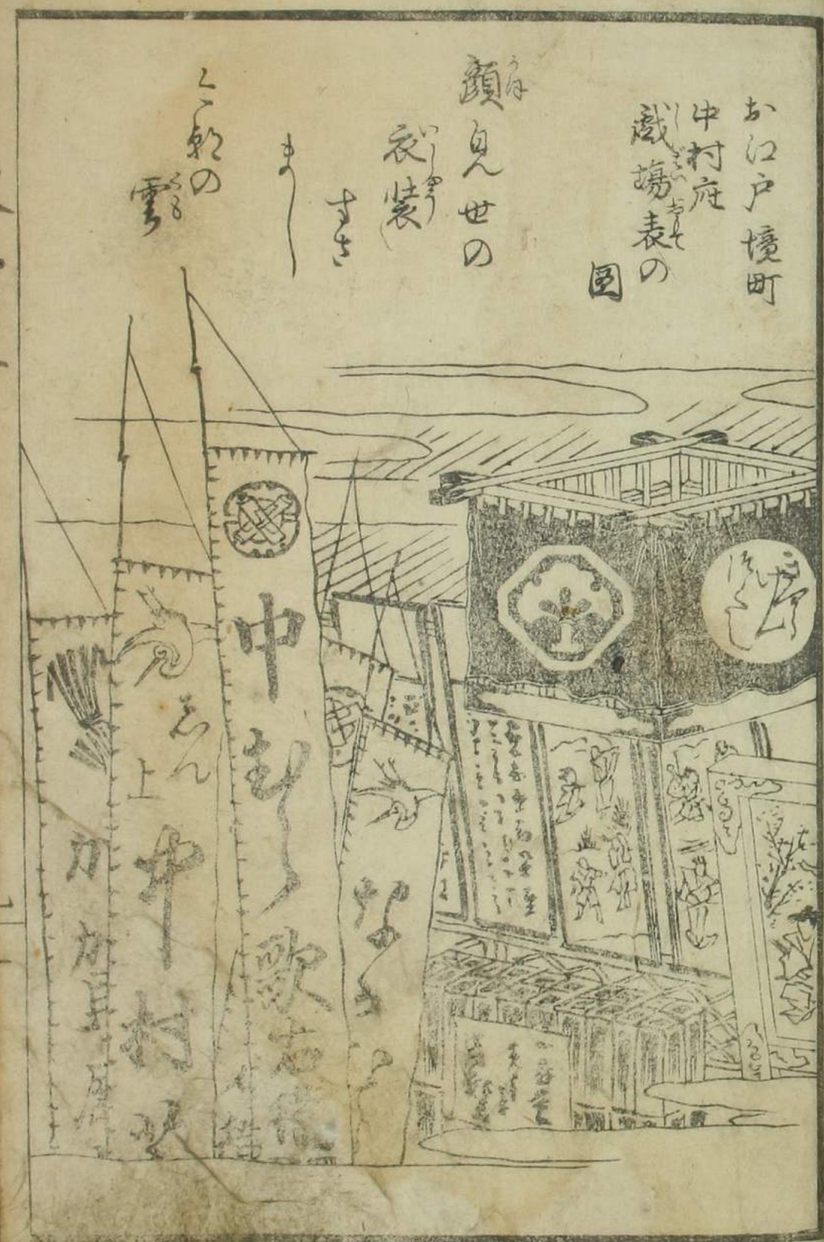
へ13
3127
特-2
へ13
3127
1
昭和九年
九月五日
購求



無象傳自序

相當花の武蔵八國邦秀鑒紀克五山人
敢白も浮雪徳秀風まで号る恵産物を苔
錦の画合風雲遠風と爰将ふを少沢日くる
所剛図者聚ふ[illegible]を愛を大
旨戯場より数て四方へ都へ引[illegible]
懐個程遥なる尚こ[illegible]
せ〻歌丈俳優より鳴素名人なる[illegible]
なるで玉よ武戯場大へなるて[illegible]
ふるる大坂へ郎戯場[illegible]

的宿をとりてうゑ天くまなくしとぐ暮ゆく秋の
枕〳〵起意生文が慕情をとりて夢
中の淫〳〵戯なるを知らずして後閑書房さ
唐突なるも故郷家の酒屋的と検看給へ
と逆上山人魯死三古郎文るもそのの
文る化を十をる二つ
菊笠亭房丸
為生かりたるのみ



家と西さへ芝殿丈
去ぬまりこのうるおぼ
あて弟を射ぬれ
あるうるとと
鉄炮よ
あるうるとと
羅れ
数くと
的をしさすよ
あてれ
大玉
木里

長吉

誉田
内記

武介

けい津
ちうう
賀

丹ちう

獄門左衛
左内
政おう
麦吉
あーとう
ぢうち長者

貞の伯母
いと永
伊左衛門

凡例

此冊子はもつぱら他の見聞のまゝをもつぱら
主しるしを精くへ編るより外に毒とする戯作にあらず大抵虚妄を實とし
呉東都好士の丈人又世世嘗て遊
たる事あるべし文中一二を引いて其實を
もの旦巷中のこゝろ記実曲弘の不束成
を第一人もまんべんなくそへ可笑をぬむ個の性
質仕方が新くまた
ふるめかしくんもまじりて物の花

芝戯
當評 真壽加賀見東傳 上之巻

浪速 南笠亭房丸 戯述

梅匂ふ難波の黒八海内陸一の繁華にして高麗買
和仕ぶ漢て朝鮮より高麗に高麗に本家
絶間もなく家に第代不易の名地にして遠近
家居軒をならべ西へ東へ小をもとはず
別も軒ならべ四季の涼多
夕納涼の客色つもりて
戯場常に樽は常に樽は

白粉を粉ひうる女婦乱髪美を第ひ和の[illegible]
より見渡せば川西岸ともよ燈火点々[illegible]
たる星のごとく舟よハ風に[illegible]
を踊るなり琴三絃の音けんの[illegible]
[illegible]て[illegible]服ひいんうう[illegible]
[illegible]義てゝりのかりて[illegible]
何くれとそのくまて自由なる事[illegible]
いとのうらくそのに雅でもなく西[illegible]
坊の山科等〻合ものの後ハも同[illegible]
花見よ歩り芝居よのうつる俄獅踊の[illegible]

ぬうとくとくとの牛ハ牛づまと治まる代のうるはし
鉄炮ハ何豚の砲なるとかの長刀ハ我もく破子屋
字ともひ都とくハ訓染の猫姫の事とうう俳優や
まる楼の知と自慢まね事る風俗の江戸ものうらく
かつぎ者の長脇ゆて同もどうの売まぬやつの
たうとうとうとうとうたう高
反中の性根通工夫もうとうとうとう
小粋ゆり二云ゆハ江戸宿のうたん
猫紙袋と結ゆうり実よ高世粋
といとんうとハ子ものと卯亥のうと月昼のまつと

器さきハ淺紀蒔ゑる麻机のうくいすの脚ゑれ
内ゑ耳のさゆきる廻ゑ洗ゑ東のゑく結し中むら
芝觀か彼地ゑて大尚アせ一粒ゑと勝ゑ時の用ゑ小ん
たんの爰ゆゑ下ゑれて徒ハハ知びあゑゑよ起ゑ上り 徒ハ
うくくくく うゆく爰ゑ爰ゑアてゆゑけのをてゆと 蠅
じゑゆゑ見ゑゑゆゑゑエ、いゑくゑゑい
蠅をなゑ吉紙さゑゑせふ蠅ゑ爰
結ゑゑせねのゑ吉ゑゑ爰のね

よりゆゑ内ゑ爰ゑ命も結ゑ吉り 茶漬詞 むゑアてゑ伺をゑゑてのゑ イヤサ
きゑ移へ爰ゑ蒔切おりゑく爰を見ていゑりのを

蠅どもゆゑ起ゑゑゆゑゑゑ

行くまうぶん太郎行く男ざ 弟 ちまてとうの 兄 ヲサ
ヲてもなくても大郎行く男ざハハハハ、ー 弟 ちまてとうの 兄 ヲサ
うめんなされ山ちまてとうの 兄 ヲサ
う 兄 ハどうやさやる名ざむざこまそん
ちもどうやさやうみなんでも 兄 ヲサ
らけでどんくり眼の 弟 ちまてとうの 兄 ヲサ
積のやうな男ざこんこん 兄 むうァそんなめんざ行く
なんでも色う白くて 兄 ヲサ
どこへ出てもはづかし行く男ざうこんこ
やまうハハハハ久ー 弟 ちまてとうの 兄 ヲサ

ゆざお見よかうらぬまづハ山見猪で 兄 ゆまる 兄 こ酒
やまでハハハ 弟 ちまてとうの 兄 ヲサ こ酒ハざこう 兄 ア、又う暑くて酒も
いけ行く 弟 ちまてとうの 兄 ヲサ 何暑く 兄 ヲサ 掛くる大くこうざ二外暑ば三人の
おぐりさ 兄 ヲサ よく解くがるやろうぐそんざこ戸切合さるる
なんで暑くうう 弟 ちまてとうの 兄 ヲサ ヲサく苦くおりんはりうをやく
くくくあるこんさんとさいざん暑やめざ扶戸くうみる行くう
た男ざちちくうけるお茶ゆ茶ざトうを見ゆう 兄 ゆう
ゆなんでもおまくト地ざ見とくる 兄 ヲサ でうた
をやくたけ 弟 ちまてとうの 兄 ヲサ ァといさてさをたいそをたいー
いけうをえ行きるを酒えうせさう押つかる行く水のちよ
後色むざうけざくくけきハ暑を

人ごみ坊主扇にもゆる場杖ありヤレく法師姿の
高人御夜和歌の縁借物も紙くおいろ戸坊町で中
村芝翫丈の新糸丈ゆるいたゞきいたゞき大あくり
八百八町八幡つくりかくつてきやうこいものゞ見物かい
びやく浮世はどうり日本国山神武天皇こゝは伊東
けんを役者八重ふもとゝねとさんざ恐悦与惜同彩一
向やくそく東西南北知りひつくるひうを加賀屋の大達
物ざと唱るしらぐ見のく評判清郎家出山家伝右人
居向大屋長屋任旦那さん奥へさん姫はさんゆきさん
紬さん中ゑさん吉ゝおいらん中之格子蜜多仲居よ

ひきまのびやうぶ毋飯櫓ふつまで
うみ先女ゝ ゆいこよ薬部
芝翫くゝと大評判そて言ゝつゝ先の母の極楽
ゆうぐうたうひなぐゝもの引ういつきゝの牡蠣家まかロく
接ものの幟出番拍てくゝ屋ゝ数いくゝは
でいこゝぬきゝゝくく奇妙頂程程の角こゝ
ほうほハうぐゝいこんつさセエあゝゝ引ヒくく 家
とんぶおゝこゝへりまつとちやべき法でぐつゝ 中 れぬ
のぶらゝこゝくうがゝ
つてロ中板中ゝよ早魃とおてゝあゝゝゝゝ
してくゝゝゝもあいゝよナア

[illegible]

[業] たぶん風雅な旅傾ぶ [四ぶ] ハイ〳〵ぬぶ〳〵ぶを書よ

又一献ぶコリヤノ〳〵ちうんぱうよ酒を盃つとる

菓子もたくさんとこの初へ猪もよ香ろ〳〵ハイ〳〵さう

なるほどめんなんと ト内へまりやの上へ元へいそりやの上へ酒油利

まゆこいつもあこのうさぶと酒利のうぶ〳〵

引らけ チヤア引らめへつて ト かしらをたゝいて きやうろう表ろハ [業] どうちく

菓子それどもんなんなるア、なるつて うちうち初へが長へたり毒よ

初へとちつて ト代内ちんぶれハは利の〳〵ハイ〳〵まがつてございやた

あまこのるへけしうるぬまいるぬるでございやきのうぶ

なんとうよ名ゐてございと [ちぶ] とんちうぶ長ろうぶ

うう又別ぶてうまい唐士金さん山の華よ金生えと

ヤなり [業] 毛西ゐうとゐもぶ大うる薄や句でうりさ

ゐぶ 〓サアそゐぶとふとそゐやをてアとゐて今の法ハどよ

やだソウサ芝居の新ぶちうつとゐても酒や青て 弛

きさんさい鯉の吸物雑の塩漬ト内じんく酔がゐて

ウ、アハウンゐつぶの安ぶ〳〵ふの造つて新帳のうとてう

兎の演うてきウ、 辰ハ天上已ハ蛇ちんく

地震ゆちゆく遠臭て いく〳〵ぶア

[業] どうたく行をいゐさんとうつゐ紙

ゆきくれと
ロれ千ぬ
ろろ
あつ
さ
れ
房丸
廿ア
十曹字

いそそくなつくりくうくとるびき 長 サア 弦新じやたいへんじやあるく
たいじやト大きな 弥 コレサ 長 公てめへのもうよやうまくなつて
おもさ行くるが見えまいしさう病ひで死ざのごろぶよ
でおめいぐげーくぐいハサ 長 ヤアー そうりィやアまアたアく
どヨいイうッもヨのヨでエートやたらよふるこのむぐハハ生辞ごろこと
仏付ちれびあるこさらくこれ絵ごあと
てアんとちくく 弥 ぎとといつちやうおやくがをとふいく紙をね
して
めてぶよいくやつくぐちの坊ちまる番つくこぶつくこぶ大ちく
鼠りどくぐちくよてこちるいちくもこのぐ紙よるいちくもこの
なーこださくおめくがいくいくきアハアー トなくをもめハ
頼まいきやうてかくくひ 長 エー引ふこちやたまくぬト夜へとんでおりうけゆきくと

いちちんぐまの「ウー」でおアいちやアいくくちよいちのぎやくく
長 へーくまつひゆんあうばさんせくくへさなん
ぎくくいはくくいやろうめぐ 長 へイくぐめぞうろ番
下され外 弥 いくくぬくくぬくくぬくくひよやたくいんぐんぐ
長 アくゆんなアくよよ生てくまさせいんでたもくく
ていちくく肝をまひびよーたトちよりをあくつきゆー
ハアくくりとかいた
茶 ハくくよいわぐまぐふさしなな
鉄炮うちん行ちら紙ぐちんとあたり
どつさりこけて行ちをみくさ
長 イヤ志ゆき示じやなのあくしやぐくまぐ

猪がだくくする時よ金弁が西まきさう臺中るおい
まきぬサアないく　もぢ　ハテそこいしい男ざいく
ぢつくるとの鼎笠かく　八　金ぢ出て
臺中ぢ宇津よ　もぢ　西　回
案　こア案をもづりて酒など一盃頂かせへ　さりよ行へ
むぢ出てきよ　もぢ　ヲットさトはけを元の位置をきげてコスぢ抱い
なりかりして出のの　もぢ　サア落動ぢ大変ぢ乳ぢく　案　なんぢ
ロはりしてて
てくをあんなぢ　ゆつて　関まぢもう　もぢ　イヤサ酒ぢもづく
も行くどう出よいナアく　案　ちうァ　もくるもう行へ大うき
さいぜんの地をめぢ食つるのぢろう合力をゆう行へ

のぢ酒ぢと思つるぢゆつをかつちぢけ　いりのぢ
合力のかりる酒をもてゆうれ
酒和　ちりゆちぢそんなう
もぢ　さんぢる合しゆぢつるちまくしいトがゆえなぢ　あぢつる
書　入うる行ぢ豆のちんぢまて
ちんうけちまて酒のもしさよ
氏　それでちつと案ぢ行けさてくいく
ひくれを西をみばしく黒さ
甘　行今ぢて地を知るひなく酒いなく只泊まる
げりなきハ　案　コヨもぢ芝散の和をちる世行へう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

久しぶりの田まんめうの神なるべ
といつて面をうゝせるとて行人うあゝアも伝授のうち
面をうゝせて見ようと大丈夫よいつてゆつくり聞く
あきれてけち猿をんべとうゝつてわるべ何がうの
松七ゆきんうゝ大白面にて蟹白もや面行へうゝなべ
猫を洗してありやめべきのふ面の薄そまはけきハ
ちつゝも行へよ親まが面をあゝせるとアめちよいつべ
什通りべ夢めべ行へうとゝふゝぎかつてゐる西へ芝
歌が来ゝりのべかゝ初へ親面めでゝきゝとお
めへハとゝいよりのゝめんめん横ても寄うゝやゝ見時

甚横でもついてゝべるゝ時甚べてんのゝゐ人べといや
べゝべきつゝかゝアゆへ面をあゝきゝをゝつて一首
うゝらかゝゝ
白面やかゝ脊やをゝて敬き弱
とやうゝたべゝふべゝとゝ十分ゝてゝけべゝとゝ
なゝへサアゝなべ寄めべゝとゝ言ゝゝを聞
べ紅戸中へ一面ゝなんゝて何べをゝ花の下姫
扇べ面ゝをゝてくゝゝのいや天文をゝんべつべ
らゝの家相見て黄きのいやゝちの猫人あゝお人
よかけゝのいべりべゝてゝの耳の寄一人べ聞ゝ

なるこの眼鏡の図　くるくるかたのぶんぎく　茶の湯

茶うこうこのと乱　さびたき　茶　ばゝア何そんなことが

そうものゝ　むぎ　ハゝゝ　おやぢ　だんごゝ　コレ

芝ゝちやゝ　おゝ江戸でちらへ　やたらと　鉄　芝トレく

何しじや　アヽ　十後中村　京ちつ　牡丹　京大留り　寺西乳の名

麁酒　多く　後ゝ　鉄　と出　幸　出　入れ

長の

吸もの　碁りんの　ふるもの　目白後　まりぐ

銚子　丸山の山く　名ゝの寄

口取　粗忽の後は　ひうだち

本猪

汁　ひいさうり　ちん　ちんしやう　ちんけ　ちゝ

坪　よ紀深刺を　川蓋の　きくゝけ　ちんこん　江戸ゝ　ちゝ

香の物　江戸ゝの　はぐれ大こん

酒の肴

出雲

鱠　なまこ　江戸後左は　牙　あまり　ゆうが

平　西瓜　江戸の　大きゝ　方ゝ　芝居　ぜ

さし身　出世の鯉の細づくり　けしかるん　いかるん　河

精ロ　ひいきとうまくを　ちりく

焼物　役者の中てのかぐら鯛

吸ものの　足拍子耳を　ちょき　役割を　ほけてさび　ほりてい　おりを　かりん　貝

二の汁　ほうがつ　ほうぼう　ぐ　人　ふうん　ふん　ぶ

菓子　西瓜のやうなるものを　ぶんこ　柿　江戸ことばしくおき　鯛の切身

桃子　えんとう　人　四方の氷水

餅菓子　先ちのもの　いくよ　すもう　どこ　ていこうけの　ひいきとうん　ちりへいこう　武蔵国を　まり　風

菓子　百代の後　むく

水菓子　つきこう　なし　ちくま　梅　ぶどう　ぶどう

餅番　口こ名を　つけこうん　立ものの　なりぶまぐ　大玉ぶの　きらきらを　江戸の後ちを　つ　ま　ぶ　毎日　ぶ　ぶ　ぶ

右し通　中ぶ　ぶ　久表　市　詠　歌　ぶ　ぶ

吉原ぶん

味ぶあると　多際　きき　いよ　芝　麻　文

上戸も　ぶ　ぶ　ぶん　ぶ　ぶ

菓 ユリやらの海ど間流の越河ぐ一首ごつ今ちぐ〜流若へ献立

しるもおいしいとくんり

ヲワト 紙幅へ芝数玉ハかが賀屋といく又ち代表の

鶴の紋ぐらかが賀のち代とい家でおるさ

蓼を見の西俗こんりかぐやちぐさぐ

去 ハしそりやりんの夢なぐ ヲワト アまぐ 又お宮まりのそげ

ふさと酒蓼るる更いそふぐうまぐちんけんの代品紙ぐある

てや 菓 なんぐく ヲワト いやそれらあるふぐろ

金ちんそ出ちる数白芝ハ芝数より流蓼へ塗

ひいき連木里まへちらしる送別の白なり

雑波はるあを物よ別き

強け尾の蠅のおりひきもおくれ

不戯宮 せ数

ちてのみも

なりう

土木

菓 てりくまあんでもちろかりてくら男だ行よ芝数丈

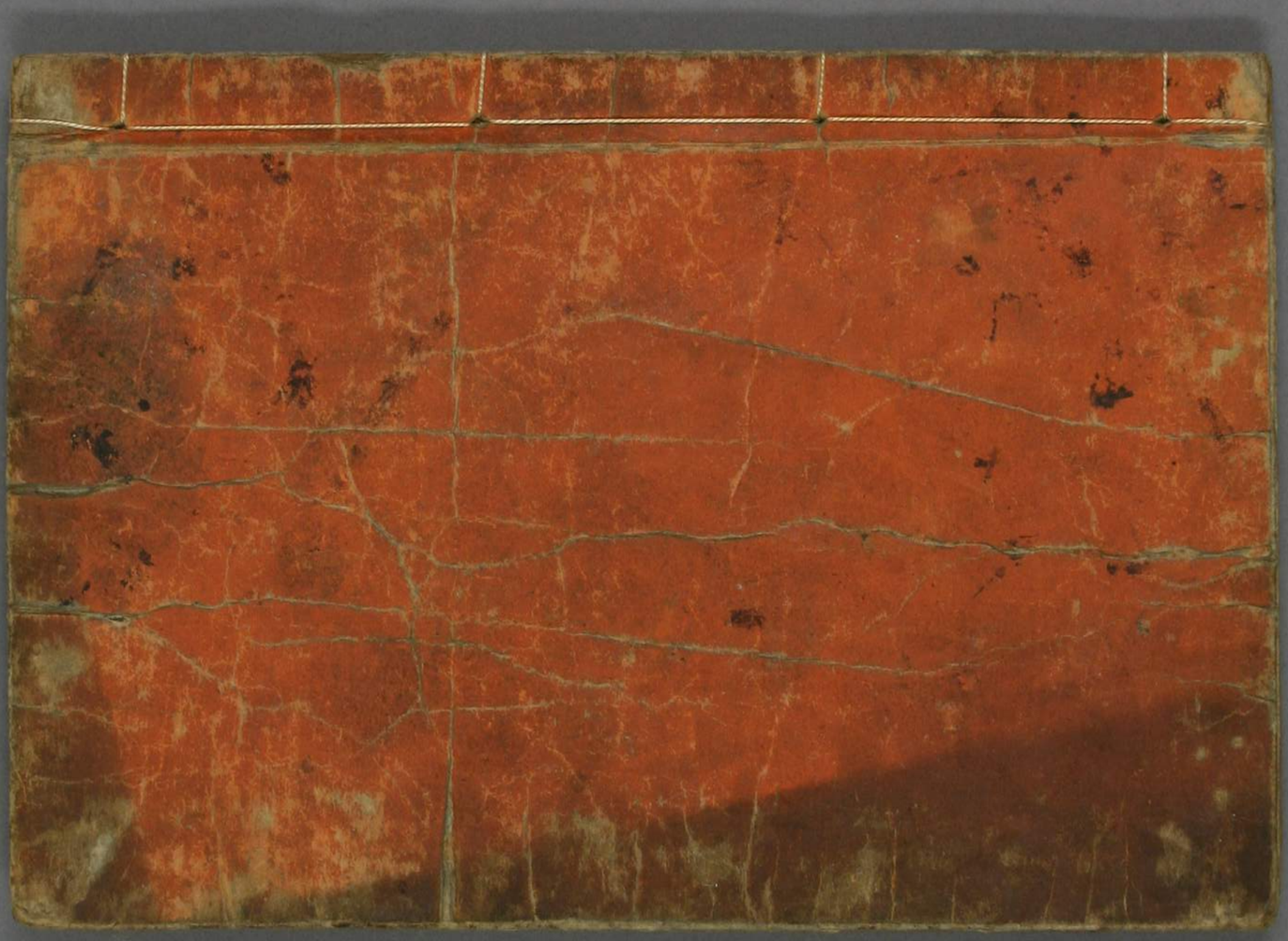
の流ハぐふぐ ヲワト 承知くらてて並て而して芝数さ海

け流ぐてや 菓 ナニ而してぐらるものうサアくへ 流刺くく

ヲワト さけるさおめくのやうる流刺くくといんちやちふハ文字屋

け流判紀のやでるうハけ 菓 ヲワトそのぐらうしぐふでてめへ

かりよろこうむぶ[illegible]ハサ[illegible]ハ素人の[illegible]
御めんなんをくる○拙[illegible]うぶ芝[illegible]の[illegible]
義むぶハとんぶむちうぶ[illegible]の初りく〳〵さア

やり引

素寿かゝ賀見東傳上終